

題は明らかにしにくくなる(李ヤハン2001)。調査対象人数を絞ると、施設間の共通項など具体的な特徴を把握しやすいが、他の高齢者の生活状況を直接的には把握できないために、普遍的な結果が得られるとは言い難い(井上由起子1997など)。

(5) 環境移行の分析における調査内容の特徴

高齢者の生活が別の環境に移るときの環境が与える影響や、新しい環境で高齢者の生活がどのように変化していくのかを明らかにする場合、数ヶ月後に一度の割合で調査を行っている研究がすべてである(小原1994、齋藤2000d、毛利2002、三浦研2000、鈴木健二2001など)。環境移行では時間変化が重要なファクターであるため、調査期間が長期にわたるフィールドワークを行う。また長期間調査を行うため調査施設を多くすることは困難であり、さらに移行の適応プロセスや時間変化の要因を特定するために調査方法も多岐にわたり、ヒアリング等を用いることが多い。こうして、一人ひとりの生活変化の様相ならびに当該施設環境の特徴や課題は詳細に捉え得るが、結果の普遍性に関しては限界がある(厳爽2003)。

3.2 行動観察の課題

前述の通り、フィールドワークによる研究では、主として行動観察を行うが、他の調査方法も併用されることが多い。これは高齢者の生活実態を明らかにする上で、いずれの調査方法も単独では充分ではない故であるが、ここでは調査方法として多くの研究で用いられている行動観察の課題について、他の調査方法とも比較しつつ考察を行う。

(1) 観察時間

建築計画分野においては、常時行動観察する研究もあるが(永原聖1998、山田あすか2002など)、多くの研究では一定時間間隔で行っている。その時間間隔の設定は、研究目的や求める結果、さらには労力にもよるが、長期的観点における研究の場合は、該当期間に対応する程度で生活を把握すれば良い

ので、10分や15分毎にあるいはそれ以上の時間間隔で行動観察する傾向にある(橘弘志1997、石井敏1997など)。短期における詳細な変化を把握しようとする場合は、例えば当該期間の高齢者の生活を把握するために常時あるいは5分ごとといったように時間間隔を詰めて行動観察する傾向にある(大塚崇雄2003、鈴木健二2003など)。このように定時行動観察を積み重ねていく方法は、必然的に観察されていない生活場面があり、高齢者の「生活の質」を総体的に把握し得ているとは必ずしも言えないが、少なくとも在来の建築計画分野では、空間的条件の持つ意味を明らかにすることに主眼が置かれ、出来れば“客観的”な資料として結果を整備し、今後の計画に適用しようとするものであることから、他の研究分野とは異なる判断をしてきたといえよう。

また、実際の常時観察または定時観察におけるフィールド上での課題として、常時観察の場合、1人の調査者が1人の対象者を観察するという方法が用いられる(井上由起子1998、三宮基裕2002)。それでも1人の行動を常時記録するため周りの状況を記録することは困難であり、対象者の行動が生じた背景を探ることは難しい。同時に多くの対象者を観察するには相当する調査員を確保しなければならず、仮に可能であっても多数の調査者が施設に入ることの影響は大きい。

一方、定時観察の場合は、1人の調査者がある時間断面で複数対象者を観察するため少ない調査者で多くの対象者を観察でき、労力の面からみれば効率性が高いと言える(松原茂樹2001など)。しかし実際には、特定時間断面で多くの対象者を同時観察することは不可能であり、対象者によるタイムラグは避け難く、調査者が研究仮説を意識した観察を行うバイアスも生じ得る。しかし、ある程度のタイムラグはやむを得ないものであろうし、このような現実的な制約以外にも、生活の質を改善することが主眼である建築計画分野では、その「質」に

直接関わると研究者が想定している行動を把握することが重要であると考えられているからである。

(2) 観察された行動の意味の把握

行動観察は顕在的な行動の記録であり、行為者自身がそこに潜ませている意味は必ずしも明白ではない。これは行動観察調査の宿命的な問題点である。例えば、高齢者福祉施設において高齢者、特に痴呆性高齢者のいわゆる徘徊は本人にとって何か目的があって歩行をしている場合もあると言われるが(文4)、在来、永年に亘って徘徊と表現されてきたように、調査者はもちろん介護職員も痴呆性高齢者各人の本当の意味するところを理解できないでいた。

高齢者福祉施設を対象とする場合、行動観察以外の調査方法についても課題はある。住まい方調査は高齢者の行動や考えの痕跡を示す家具やしつらえを観察するものであり、高齢者本人を観察するのに比べ一つのフィルターを通すことになる。高齢者へのヒアリング調査では、痴呆のない高齢者にとっては信頼性も高いが、痴呆を有する高齢者にとっては意思疎通が困難な面があり、それによって得られる結果の意味は必ずしも明快ではない。介護職員へのヒアリングや日誌等の記録も、介護職員の観察という媒介を経ることになる。

以上のように、高齢者の生活の実態を具体的に明らかにすることにおいて、現時点では行動観察がより優れた調査方法であると思われる。

観察による行動記録から、高齢者の行為の主観的な真意を把握するために、次の2点が考えられる。文5に「行動の意味は、行動が生起した文脈、同時に生起した他の行動との関連、その人間の過去の行動様式など多種の情報をを用いて判断される」と述べているように、高齢者の顕在的な行動の観察記録のみではなく、周囲の状況も多面的に併せて記録すること、またこのような行動観察だけでなく、個人履歴や家族・職員等に対するヒアリング等を加えることによって、高齢者の生活の本当の意

味をより深く把握しようという試みがあり、積極的に適用した研究もある(井上由起子1997、山田あすか2002)。

(3) 調査者がフィールドに入ることの影響

日常の高齢者の生活の様子を明らかにするために、調査者は施設を訪問し住み込んで行動観察を行うわけであるが、普段は存在しない調査者が入ることにより、その日常生活に影響を与え実際には日常ではない生活を観察している可能性が指摘される。研究の目的や求める結果さらには労力にもよるが、特に1期1日や1施設1日だけの行動観察を行った研究(斎藤芳徳2000a、橋弘志2002など)においては、調査者の影響について慎重な判断が求められる。調査者が高齢者にどの程度の影響を与えているのか明らかにすることはできないが、調査者が高齢者の生活に与える影響を最小限にするため様々な工夫が行われている。GHのように少数定員の小規模施設では、調査者を1名か2名に限る(厳爽2000)、行動観察を連続数日に亘って行い馴染みの関係を築いて日常性の障害を減らす(小原博之1994、山田明子2001など)等がある。

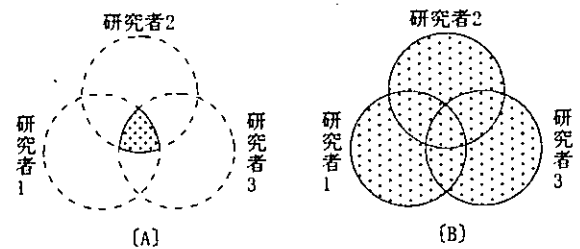
ほとんどの研究では、高齢者一人ひとりを識別して調査を行っており、高齢者の顔と名前を覚える過程としての予備段階で何度も対象施設を訪れている。また当然ながら、調査準備のために、施設現状把握や調査方法検討等、相当回数調査施設を訪問している。これらの過程は、調査者が高齢者に与える影響を少しでも軽減している可能性があると言える。

D. まとめ

建築計画分野における高齢者福祉施設の研究は、対象施設を限定してそこで生活する高齢者と環境の関係を行動観察により明らかにしているものが多い。その関係についても表面的に表れる生活行動と空間構造の関係を扱うのみではない複雑な関係を扱っている研究もある。

高齢者にとっても、生活は人の心理やそこで暮らす価値や意味なども含んでおり、環境については空間構造などの物理的環境だけでなく社会的、運営的環境も含めた施設環境(文6)として、ありのままの環境として扱われねばならない。このように、高齢者の内面まで深く掘り下げ環境をありのままに扱う背景として、高齢者が今までの人生で長年培ってきた生活様式・経験・歴史はその人固有のものであり、それを受け止める住まいとしての高齢者福祉施設のあり方が求められ、単に行動と空間との表層的な関係の機能的処理にのみ限定された問題ではなくなり、行動観察を主体としたフィールドワーク研究による意味の解明が試行されるようになったと考えられる。

社会の動きと連動する形で建築計画分野において高齢者福祉施設を対象とした研究が盛んになり、研究の蓄積が行われてきたと考えられるが、それではこれらの研究がどのように相互に結びつき次の計画へとどう理論づけ生かされるべきかが求められている。従来建築計画の分野では「普遍的な計画理論」(文7)が求められてきた。しかし、個々の高齢者の事例を取り上げ、ありのままの環境を扱った研究が多い高齢者福祉施設におけるフィールドワーク研究では、「普遍的な計画理論」を求めることは難しい。どの研究でも施設独自の条件を持っており、個人ごとに独自のものを持っている高齢者を対象としている以上、特定の状況に固有の課題把握とその解決への「個別的な計画理論」(文7)でしか成立しえないものだと考えられる。とすると次の計画へとどのように結びつけるべきかあるいは結びつかないものか考えるべきかが課題となる。ここで心理学分野において近年注目されている現場心理学の方法論が参考になるものと考えられる(文5)。心理学では人間の一般的な特性を求めため、さまざまな研究の数量的データから共通する部分だけを採用するのに対して現場心理学では一つのフィールドに対して得られた様々な研究の質的データをす



数量的データと質的データの個人の歪みは正のしかたの相違
 (A) 数量的データ 判断、解釈の一致する部分のみを採用する
 (B) 質的データ 判断、解釈の可能性をできるだけ広げる
 やまだようこ「現場心理学の発想」p.181より

図-2 数量的データと質的データの個人の歪みは正のしかたの相違

べて取り入れ、その研究では気づかない変数を他研究が見つけるとい解釈の可能性を広げる方法が提案されている(図-2)。高齢者福祉施設におけるフィールドワーク研究でも現場心理学と同様に、各研究において環境の条件はすべて異なり多様な高齢者の生活の問題を取り扱う以上、できるだけ判断、解釈の可能性を広げて次の計画へと活用する方法は有効であると考えられる。

別表 フィールドワーク研究論文の概要(1)

第一著者 発表年	施設	方法				分析方法							
	単 複	行	住	高・ヒ	職・ヒ	内容				型	属	環	移
						期間	対象人数	時間間隔	回数				
	目的:												
	結論:												
	特徴:												
小原博之 1994 ⁽⁸⁾	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>			行/1期4日 ヒ/1年5ヶ月	入居者(126/108)	行/常時 行・ヒ/2日~1週 間ごと					<input type="checkbox"/>
	目的: 施設入所後の環境親和過程について												
	結論: 在宅からの日常生活が継続が精神的な安定をもたらす。人的関係からの目安として10人程度の規模が望ましい。 特徴: 1週間程度ごとにヒアリング・観察しており、なじみの関係を持つ人数を行動観察からのみ判断しているが日常生活の変化とそれによる痴呆性老人の変化を克明に明らかにしている。												
柿沢英之 1997 ⁽⁹⁾	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>				3期計7日	入居者(51/60)	15・30分ごと	3期計117回				<input type="checkbox"/>
	目的: 集まりの様態からみた共用空間のあり方について												
	結論: グループ化は入居者間の共通事項の共有と場所に帰因する。グループは入居者の出入りにより変化していく。グループ化は居室配置により影響を受ける。 特徴: 継続的な調査により場所、居室替えなどの環境がグループの変遷に影響を及ぼしていることを明らかにしているが15・30分ごとの観察であるため入居者のグループすべてを明らかにしているとは言い切れない。												
橋弘志1997 ⁽¹⁰⁾	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>				5期	入居者(50/50)						<input type="checkbox"/>
	目的: 環境への働きかけによる施設での個室化の役割について												
	結論: 個室への持ち込み数の増加による段階的な領域形成がみられる。個室の領域形成過程は物により個室環境の意味づけと自己アイデンティティを再構成する過程。 特徴: すべての入居者の個室内の持ち込み物を継続的に調べることで個室における領域形成の過程を明らかにしているが、すべて個室であるためその役割が明白でない。												
井上由起子 1997 ⁽¹¹⁾	4	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	4施設各1日	行/入居者(72/72、 56/100、41/80、 49/50) 住/入居者(12/72、 8/56、15/50)	15分ごと	各施設49回				<input type="checkbox"/>
	目的: 個人的領域形成における対人関係、心理状態の影響について												
	結論: 在室率や居室内領域形成より1人になれる空間が必要である。プログラムによる共用空間の滞在が多く、それに対応した空間だけでなく複数の中間領域が必要である。 特徴: 行動観察の事例に比べ居室の領域形成に関する事例が少ないが、ほぼ全入居者あるいはフロア全入居者を対象に滞在状況を考察しているため、各施設の居室や共用空間の領域形成を示している。												
井上由起子 1998 ⁽¹²⁾	4	<input type="checkbox"/>				各施設1期1日	介護職員4・5名	常時					<input type="checkbox"/>
	目的: 空間形態が及ぼす個別介護の可能性について												
	結論: 全介助行為のうち6~8割弱が直接介助であるためその質を高めることが必要である。個室化・寮母の移動距離より看護単位の小規模化が有効な試みである。直接介護入居者次第であるため介護諸室と入居者の滞在空間との位置関係の重要である。 特徴: 各施設4・5名の寮母の常時観察より、入居者属性や勤務体制の違いを考慮する必要があるが空間形態の違いによる介助行為の特徴を示している。												
橋弘志1998 ⁽¹³⁾	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>			5期各1日	入居者(20/50)	15分ごと	各期49回				<input type="checkbox"/>
	目的: 環境への働きかけによる施設の共用空間の役割について												
	結論: 施設のプログラムだけに及ばない入居者それぞれの場の形成と意味づけが行われていた。入居者それぞれの場があり、それらをサポートする施設空間のあり方が必要。 特徴: 痴呆軽度の入居者20人を対象としているためこの施設における場や共用空間の役割が明白でないが、行動観察だけでなくヒアリング調査をすることで入居者それぞれの場やその意味付けを明らかにしている。												
林悦子1999 ⁽¹⁴⁾	2	<input type="checkbox"/>				各施設2期	入居者(80/80、 51/57)						<input type="checkbox"/>
	目的: 個室空間の最適条件について												
	結論: 共用空間が1ヵ所の場合、個室に閉じこもりやすくなる。心身状況の低下により安全確保のため職員・家族が主体に家具配置する。痴呆症状や車いすなどの移動形態により個室内への家具・物品の持ち込み数、種類、配置が異なる 特徴: いくつかある個室のタイプを考慮していないが、継続的な調査を行うことによって身体属性の変化と居室の住まい方の変化を明らかにしている。												

特養・老健

別表 フィールドワーク研究論文の概要(2)

第一著者 発表年	施設		方法						分析方法								
	単	複	行	住	高	七	職	七	内容				型	属	環	移	
									期間	対象人数	時間間隔	回数					
	目的:																
	結論:																
	特徴:																
橋弘志 1999 ¹⁵⁾	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	5期各1日	入居者(20/50)	15分ごと	各期49回	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	目的: 時系列変化による個人的領域形成過程について																
	結論: 時間変化により中間領域の意味づけが変化する。各個人により空間構成の階層ごとにそれぞれ意味づけしている。																
特徴: 1日の行動観察であるためその人の共用空間の場の意味すべてを明らかにしているとは言えないが、継続的な行動観察やヒアリング調査より各入居者の生活の変化を詳細に捉えている。																	
井上由起子 1999 ¹⁶⁾	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	入/5期各1日	入居者(49~52/60)	入/15分ごと	各期49回	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
								職/2期各1日	介護職員4名	職/常時							
	目的: 介護方針の変更による時系列変化にみる生活の再構成の過程と介護のあり方について																
結論: 介護処遇の変更による安定した生活が崩壊することから再構築のための領域形成をサポートする物理的環境と運営的環境が重要である。介護方針の変更により共用空間の使われ方が変化するから重度化を想定した計画が必要である。																	
特徴: 継続的な行動観察より介護方針の転換という環境移行をもたらす入居者の生活の変化を明らかにしているが、介護職員と入居者の行動観察の方法が期間・対象人数など異なるため介護のあり方について環境移行の影響が明白でない。																	
斎藤芳徳 2000a ¹⁷⁾	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	各施設1期1日	入居者(42/50、30/50)	15分ごと	52回、50回	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	目的: 人-車イス-環境のなかでみる車イスの環境のあり方について																
	結論: 移動具としてではなく、イスとして車イスは使われている。高座位程度の車イス利用者とイス利用者の行為は類似している。車いす使用者の生活展開は自立度・座位良好度・生活行為により6タイプに分類される。																
特徴: 車いす使用者とイス使用者の対象人数が異なり、2施設における車いす使用者を対象にしているが、対象人数を増やし車いす使用者の特徴を明らかにしている																	
斎藤芳徳 2000b ¹⁸⁾	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	1施設2期	入居者(26~78)	-	-	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
								3施設1期									
	目的: 車イスの移動能力の実態について																
結論: 車イス使用者の移動速度の独歩者や車いす非高齢者よりも遅い。車イスの下肢駆動が有効。良好な座位保持により自力移動は可能である。車イス使用者にとって物理的・時間的短縮による心理的負担の低減が求められる。																	
特徴: 対象者属性の移動手段について条件によって対象人数が異なるが、各施設とも同一区間の移動速度などを計測しているため施設に関係なく対象者を多くし、高齢者の車いす移動能力について明らかにしている。																	
斎藤芳徳 2000c ¹⁹⁾	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	各施設1期1日	入居者(4/100、5/100、5/52)	15分ごと	各施設53回	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	目的: 移動能力と生活展開の関連について																
	結論: 高移動能力者の移動行為が多発する。低移動能力者にとって生理的行為による生活展開の契機となっている。介助移動者のプログラム時間外の移動回数は少ない。																
特徴: 1日の15分ごとの行動観察であるが、対象人数を少なくすることで移動に関する現象まで観察し、各施設における車いす利用者の移動と生活展開の関係を明らかにしている。																	
斎藤芳徳 2000d ²⁰⁾	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	3期各1日	入居者(6/80)	15分ごと	各期53回	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	目的: モジュラー型車イスの使用による生活展開の変化について																
	結論: 車イスの変更・調整をもたらす移動速度の変化は僅かである。車イスの変更・調整により各入居者の生活展開への影響がみられた。																
特徴: 実験的にモジュラー型車いすを導入するため事例が6人と少ないが、微細な車いすの動きまで分析することでモジュラー型車いすの特徴と課題を明らかにしている。																	
李ハヤン 2001 ²¹⁾	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	各施設1期1日	入居者(各施設全入居者)	15分ごと	各施設53回	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	目的: 平面的特徴から空間と入居者の関わり方、行為の起こりうる要因について																
	結論: 一括的生活単位と分散的生活単位に滞在率に差がみられた。個室と多床室による滞在比率に違いはみられない。共用空間に設け方によって滞在・行為内容が異なる。施設のプログラムが生活に影響を与える。																
特徴: 各施設全入居者を対象にした1日15分ごとの行動観察より、入居者属性などその他の要素を考慮していないが空間構成より滞在・行為の特徴を明らかにしている。																	

特養・老健

別表 フィールドワーク研究論文の概要(3)

第一著者 発表年	施設		方法				分析方法									
	単	複	行	住	高	ヒ	職	ヒ	内容							
									期間	対象人数	時間間隔	回数	型	属	環	移
特養・老健	足立啓 ^{2001^x22)}	2	○					4期各1日	入居者(27/100)	10分ごと	各期73回				○	
	目的: 段階的建替えの環境移行による行動・性格に及ぼす影響について															
	結論: 移行により空間的に詰め込まれた状態では無為や自室滞在が増えるが、ゆとりがある空間に移行後は会話や食堂の滞在が増える。移行による影響が見られない人は他人を受け入れがたい性格である。															
	特徴: 性格の類型化が10人に限られているが、継続的な調査から環境移行による行動の変化を性格面から把握している。															
	松原茂樹 ^{2001^x23)}	2	○						4期各2日	入居者(25/30)	15分ごと	各期90回				○
	目的: 大規模介護空間からグループリング空間への環境移行による交流の影響ならびに変容について															
	結論: 環境移行により会話グループが大きくなった。移行前の同居者同士の会話グループが継続したり、他者との会話により見られなくなる場合がある。移行後は生活単位ごとに会話が行われている。															
	特徴: 各期2日の15分ごとの行動観察であるため定時観察以外の交流を捉えきれていないが、4期1年にわたる継続的な調査より交流の変容を詳細に捉えている。															
	山田明子 ^{2001^x24)}	○	○						1期計10日	入居者(25/80)	常時				○	
	目的: 共用空間における他入所者との関係を中心とした入所者の生活行動と場との関わり方について															
結論: 入所者の交流タイプを7種類に類型化し、同じ人でも場所ごとに交流を使い分けている。一人で居る非交流行動を類型化し、様々なタイプを可能にする物理的な環境設定が必要。																
特徴: 自立度の高いグループのみを対象としているが、10日間にわたる調査によりその時期の入所者固有の交流と場所の関係を把握している。																
橘弘志 ^{2001^x25)}	3	○		○	○			各施設1期1日	入居者(48/50、45/50、49/50) 介護職員(すべて不明)	15分ごと	各施設48・49回		○	○		
目的: ケア環境(物理的環境・制度的環境・社会的環境)が入居者の生活に与える影響について																
結論: 中間領域はソフトとハードの織りなす総合的なケア環境としてとられることが重要。ケア環境のあり方が重度痴呆入居者の画一的でない生活をもたらす。																
特徴: 1日の行動観察より各施設属性のばらつきがあるが、入居者の生活を類型化し痴呆程度と関連づけ、ほぼ全入居者を対象にして各施設のケア環境の特徴を明らかにしている																
西野達也 ^{2001^x26)}	○	○						3期各3日	入居者(50/60)	15分ごと	各期123回		○			
目的: 入居者の社会的な生活環境をより豊かにする共用空間のあり方について																
結論: 居室と食堂の間に入居者が落ち着ける場所があること。居室を囲う広間は人の気配を感じる程度の適度な間合いを自発的に調整可能であること。																
特徴: 8ヶ月3期各3日の行動観察を行っているが、まとめて分析し共用空間の特徴を明らかにしている。																
古賀紀江 ^{2002^x27)}	○		○	○				1期	入居者(46/49)	-	-			○		
目的: 入居者が所有する「もの」が高齢者居住施設のなかで果たす役割について																
結論: 身体状態が個人の「もの」の所有状況を左右する。痴呆程度と物品の量が負の相関を示している。																
特徴: ヒアリング可能者が限定されるが、ヒアリングが困難な入居者に対しても写真撮影から物品数と心身状態の関係を示している。																
毛利志保 ^{2002^x28)}	○	○	○					住/3期計9日間 行/1期不明	入居者(31/100)	行/常時					○	
目的: 家庭的としての個室環境に求められる要件について																
結論: 時々生活にあわせて多様に配置できる居室環境の重要性。ベッド配置について事前に本人や家族の意見を聞く配慮が必要。入居者の生活と居室周辺の空間との関連が希薄であり空間的に住宅になっていない。																
特徴: 対象者が31名と限られているが、継続的な個室の住まい方調査より入居者の生活が変化していくプロセスを家具配置や持ち込み物の視点から示している。																
芦沢由紀 ^{2002^x29)}	○	○	○	○				1期計9日	入居者(29/80)	常時	9時間		○			
目的: 個室の住まい方と居室内外での過ごし方について																
結論: 入居者の生活様態に応じた設えを具現化できるような自由度のある居室が必要である																
特徴: 対象者が29名と限られているが、居室での持ち込み物や過ごし方についてマッピングとヒアリングを行い、居室内外での過ごし方を行動観察することで、施設での各人の生活像全体を把握している。																

別表 フィールドワーク研究論文の概要(4)

第一著者 発表年	施設		方法				分析方法								
	単	複	行	住	高・ヒ	職・ヒ	内容				型	属	環	移	
							期間	対象人数	時間間隔	回数					
特養・老健	橋弘志2002 ^{文30)}	3	○	○	○		各施設1期1日	入居者(48/50、45/50、49/50)	15分ごと	各施設48・49回		○	○		
	目的：小規模処遇を目指すことによる空間、ケア、その結果としての入居者の生活の違いを分析し、semi-private・semi-publicの意味や役割を捉え直す														
	結論：施設ごとに入居者の自立性・主体性や関係性・社会性に違いが見られた。施設間の違いは公私の段階性ではなく、公共性という環境の質が個人の主体性と施設の社会性との関係を表す違いとして捉えられる。														
	特徴：1日の行動観察より入居者の移動と痴呆程度と関連づけているが、ほぼ全入居者を対象にして各施設のケア環境の特徴を明らかにしている。														
	三宮基裕2002 ^{文31)}	5	○					各施設1期1日	入居者(3~16/50~80)	常時			○		
	目的：アルツハイマー(AD)型痴呆と脳血管性痴呆(VD)型の生活行動特性の把握														
	結論：AD型痴呆は交流の場としてのホールを中心として生活領域が施設全体に広がるのに対し、VD型は限定されたスペースである。														
	特徴：空間構成など条件が異なる5施設でAD型19名、VD型23名を対象に行動観察を行うことによりAD型とVD型の行動特性を明らかにすることに特化している。														
松原茂樹2002 ^{文32)}	1	○					各施設1期1日	入居者(21/80、22/62) 介護職員(6、11)	5分ごと	各施設145回			○		
目的：物理的環境、ケアのあり方が入居者の生活、介護職員のケアのあり方に与える影響について															
結論：職員のユニット内不在は職員体制に影響を受ける。介護職員の関わり方はユニットの入居者属性、空間の条件、職員体制に影響を受ける。															
特徴：入居者属性が他と異なるユニットがあるが、1日の行動観察より各施設のケア環境の特徴を明らかにしている。															
芦沢由紀2003 ^{文33)}	○	○	○	○			3期各3・4日	入居者(29/80)	常時					○	
目的：生活様態、特に交流と場所との関係の経年変化について															
結論：空間的連続性がないなど建築要因により行動範囲や行為内容が制限される。居室と共用空間に偏りなく滞在しあまり交流しないタイプが最も多い。交流グループ形成の変容は属性の変化に影響を受ける。															
特徴：29名を対象にし、最大2年間の間隔があるとはいえ3期2年強にわたる調査より、各入居者の交流の変容を詳細に捉えている。															
大塚崇雄2003 ^{文34)}	○	○					3期各2日	入居者(26/50)	5分ごと	各期145回				○	
目的：調整機能付き車いすの使用が車いす操作・座位や生活展開に与える影響について															
結論：一部介助群で車いす変更の効果があつた。座面の個別対応・座位保持機能・フットレストの位置調整が必要であること。車いすだけでなく、ベッドやテーブルなど生活設備の配慮が必要である。															
特徴：移動・移乗能力別の対象者数にばらつきがあるが、各入居者を継続的に調査することで調整機能付き車いすの特性と課題を明らかにしている。															
李ハヤン2003 ^{文35)}	6	○					各施設1期1日	入居者(各施設全入居者)	15分ごと	各施設45回			○		
目的：空間の段階構成が入居者の滞在・行為に与える影響について															
結論：分散配置の施設は多段階に生活領域が構成されているが、一括配置の施設では3段階程度である。共用空間の分散配置の施設では共用空間での滞在が多いが、一括配置の施設では居室での滞在が多い。															
特徴：各施設全入居者を対象にした1日15分ごとの行動観察より、入居者属性などその他の要素を考慮していないが、各施設の段階構成と滞在・行為の関係を明らかにしている。															
大塚崇雄2004 ^{文36)}	2	○					各調査1期2日	入居者(30/46)	10分ごと 常時	146回		○	○		
目的：移動・移乗能力と痴呆程度による車いす高齢者の生活展開と空間構成の異なるユニットの違いによる生活展開について															
結論：自立群には積極的な余暇行為をさらに誘発するハードやソフトの整備が必要、一部介助群(痴呆軽度)には移乗動作の自立支援を目的とした環境作りやケアの見直しが必要、一部介助群(痴呆重度)には勤務スタッフの増加やパート職員の配置が必要。スタッフと入居者間の物理的距離が短いことで介助依頼を行いやすい環境が創出される。															
特徴：移動・移乗能力や痴呆程度別の対象者数にばらつきがあり、また行動観察、移動観察、職員追跡の調査時期が異なるが(最大6ヶ月)、空間構成の違いが入居者の生活や移動、職員のケアに与える影響について明らかにしている。															

別表 フィールドワーク研究論文の概要(5)

第一著者 発表年	施設		方法				分析方法							
	単	複	行	住	高・ヒ	職・ヒ	内容				型	属	環	移
							期間	対象人数	時間間隔	回数				
	目的:													
	結論:													
	特徴:													
石井敏1997 ^{x37)}	4	○					各施設1期1日	入居者(10/10、11/11、16/18、10/10)	10分ごと	各73回				○
	目的: 空間利用や人間関係の形成の実態の把握													
	結論: 日常生活の構成に運営方針・理念が直接的に影響している。痴呆・自立度が同じ程度ではケアや運営にとって合理的であるが、混合していても同じ程度の入居者同士では得られない関係が得られる。居室の配置、共用空間の形態、そこでの家具などのセッティングは直接的に入居者の生活行動に影響を与える。													
特徴: 痴呆程度にばらつきがあるが、4グループの比較調査より各グループホームの全般的な特徴を明らかにしている。														
永原聖1998 ^{x38)}	2	○		○	○		行/各施設1・5日 行・ヒ/各施設1 年間	入居者(7/6、109/50)	行/常時 ヒ/月に1週間程 度					○
	目的: 専門治療病棟と対比的に少人数ケアの有効性について検証													
	結論: 大規模な専門治療病棟では世話を一方的に受けている。グループホームでは、痴呆性老人が援助行為により連帯性が保持されている。													
特徴: 病棟が109人に対し、グループホームが7人の対象者であり、また施設により調査方法が多少異なるが、1年間に及ぶ継続的な調査より各施設各入居者の日常生活を明らかにしている。														
藤爽1999 ^{x39)}	○	○				○	3期各3日	入居者(7/9)	10分ごと	各期237回				○
	目的: 入居者が居室を認識していく過程、諸空間になじんでいく過程について													
	結論: 入居者それぞれのパターンで生活のリズムを定着する。居室を拠点にする入居者は明確な目的を持って共用空間を利用し、共用空間を拠点にする入居者は場面に応じて共用空間全体を利用する。初期段階でのスタッフの誘導の有効性であり誘導から自発的な利用に変化する。多様な空間の選択による空間のなじみが促進する。													
特徴: 空間利用により入居者7人を2タイプに類型化しているが、5ヶ月3期の継続的な調査より介助の受け方や各入居者の空間利用の変化を明らかにしている。														
G H 石井敏1999 ^{x40)}	○	○					3期各3日	入居者(7/9)	10分ごと	各期237回				○
	目的: 空間と入居者の関わりについて													
	結論: ある程度自主性を重んじたケアプログラムによる生活構成と多様な建築空間・家庭的なスケールや全体を把握できる規模によりそれぞれの生活にあわせた空間を選択し、個別的な生活を構成している。													
特徴: 空間スケールの比較がない一事例の調査であるが、3期にわたる調査の積み重ねや時間変化により各入居者の空間利用などの特徴を明らかにしている。														
藤爽2000 ^{x41)}	○	○				○	3期各3日	入居者(7/9) 介護職員	10分ごと	各期237回				○
	目的: 入居者がなじんでいく過程でのケアあるいは運営的環境の役割と影響について													
	結論: 直接的な介護だけでなく、職員の声かけといった心理的なサポートが必要。入居者のなじみに職員の関わりは不可欠であるが、過剰な関わりは入居者の生活リズムに影響を与える。なじみの過程で入居者の環境への働きかける能力が高まるにつれ、職員からの働きかけが減少する。													
特徴: 職員との関わり方により入居者7人を3タイプに類型化しているが、5ヶ月3期の継続的な調査よりケアのあり方と入居者の生活の関係の変化を明らかにしている。														
三浦研2000 ^{x42)}	2	○					各施設1期3日	入居者(7/12、6/14)	常時					○
	目的: 小規模処遇におけるケアの特徴と生活展開への影響													
	結論: 職員配置の違いによりケアを受ける場所が影響する。ケアを受ける場所の違いにより会話状況が影響する。日常会話の多様化により居室滞在率が低下している。													
特徴: 空間構成や入居者属性がほぼ同じだがケアのあり方が異なる施設の比較調査より、連続的に話題が移りいく入居者と職員の会話を判断しているが、ケアと生活展開の関係の特徴を明らかにしている。														
石井敏2000 ^{x43)}	10	○					各施設1期1日	入居者(ほぼ全入居者)	5分ごと	145回			○	○
	目的: 非痴呆高齢者との比較による痴呆性高齢者の空間利用の特性について													
	結論: 痴呆GHは共用空間の滞在割合が多い。痴呆度が高いほど居室の滞在割合が減少する。移動が自立している入居者の居室の滞在割合が高い。非痴呆GHにおいて痴呆疑う者と非痴呆入居者の空間利用特性が比較的同様である。													
特徴: 属性ごとの対象人数にばらつきが大きい、グループホームにおいて対象施設を増やし、対象人数を増やすことによって属性の違いによる空間利用の特性を明らかにしている。														

別表 フィールドワーク研究論文の概要(6)

第一著者 発表年	施設		方法				分析方法															
	単	複	行	住	高・ヒ	職・ヒ	内容															
							期間	対象人数	時間間隔	回数	型	属	環	移								
	目的:																					
	結論:																					
	特徴:																					
三浦研2001 ^{x44)}		3	○				3期各3日	入居者(7/12,6/14)	10分ごと											○	○	
	目的: 2施設の統合によるケアの継続性と入居者の適応過程																					
	結論: 物理的環境・人的環境(ケアスタッフ)変化の経験グループは物理的環境の変化のみの経験グループより、自室の閉じこもりが増加、入居者と職員との会話において自発的会話の割合が減少、介助に関する会話が多い。しかし、入居3ヶ月後には自発的会話と日常会話が入居前と同様になる。																					
特徴: 2施設が統合して1施設になる過程を継続的な調査によりケアスタッフを伴うグループと伴わないグループの比較から連続的に話題が移りいく会話を判断しているが、ケアの受け方の時間変化を明らかにしている																						
鈴木健二 2001 ^{x45)}		○		○	○		4期各2日	入居者(6/9) 介護職員4名	5分ごと												○	
	目的: 入居者の生活に焦点をあてた入居者とスタッフと物理的環境の相互浸透にみる生活とケアの内容の時間変化																					
	結論: 居室に思い入れの物を持ち込むことによって生活に多様性が生まれる。居室周りの共用空間を中心とした滞在から次第にホーム内に幅広く展開する。時間の経過による安定した人間関係が形成される。スタッフの影響を受けながら徐々に自発的に生活を再編成していく。																					
特徴: 開設2ヶ月後から2ヶ月ごとの継続的な行動観察、住まい方やヒアリングより、6人の入居者の生活とスタッフのケア内容の変化を詳細に捉えている。																						
鈴木健二 2002a ^{x46)}		○		○			4期各2日	入居者(6/9) 介護職員4名	5分ごと												○	
	目的: 介護職員のケアに焦点をあてた入居者とスタッフと物理的環境の相互浸透にみる生活とケアの内容の時間変化																					
	結論: スタッフの滞り場所と入居者の滞り場所からさきげない見守りの関係性を成立させる空間の重要性。徐々に入居者が生活を取り戻すにつれ、スタッフのいざないや黙視待機が増加する。徐々に入居者が生活を取り戻しつつも常にスタッフの陰のサポートがある。																					
特徴: 開設2ヶ月後から2ヶ月ごとの継続的な行動観察、住まい方やヒアリングより、スタッフのケアが6人の入居者の生活に与える影響と変化を明らかにしている。																						
G H 石井敏2002 ^{x47)}		12	○				各施設1期1日	入居者(各施設ほぼ 全入居者)	5分ごと												○	
	目的: 痴呆性高齢者の生活行動に影響を与える環境要素について																					
	結論: 変わりゆく属性の集合体であるため常にグループの特性を把握しながら柔軟に変化させ対応していく運営・ケアのあり方が必要。入居者の生活行動は居室とダイニングを結ぶ領域で「ひと」「もの」に引きつけられ発生するため自発的な行動を補うケアが必要。																					
特徴: 各施設1日だけの行動調査であるが、空間、属性などが異なる施設を比較することで各施設の特徴を明らかにしている。																						
鈴木健二 2002b ^{x48)}		2	○				各施設1期2日	入居者(各施設9/9) 介護職員(4,4)	5分ごと												○	
	目的: 物理的環境の違いが入居者の生活・スタッフのケアに及ぼす影響																					
	結論: 中間領域としての共用空間は、入居者の日常的な動線や視覚的な広がりなどに影響を及ぼす。空間構成の違いは入居者の生活に悪影響を及ぼさないようにするスタッフの動きに影響を与える。移動中に自然にである情報を多様に仕掛けることで自発的な生活関連行為が展開していく。																					
特徴: 観察時間帯のすべてが勤務時間と一致しない各施設4人の調査であるが、他の条件をほぼ類似させ物理的環境が異なる2施設を比較することで、各施設の入居者の生活やスタッフのケアの特徴を明らかにしている。																						
山田あすか 2002 ^{x49)}		○		○	○	○	2期4・8日	入居者(8/9)	常時												○	○
	目的: 1人ひとりの居場所とそこでの過ごし方から居住環境やケア環境の構築指針について																					
	結論: 痴呆の程度に関わらず、個々の居住者には他の居場所よりも意味合いの強い場所(固有の居場所)がある。固有の居場所は人間関係などを含めたその時々でのホーム内の状況や居住者の個人的要素間で微妙な均衡を保ちながら形成している。固有の居場所は個々人の個人的要素が最も重要である。																					
特徴: 痴呆のある入居者に他者の好意感をヒアリングしているが、長期にわたる常時観察や入居者・介護職員へのヒアリングより個々の入居者がもつ居場所の意味を明らかにしている。																						
敵爽2002 ^{x50)}		2	○				9期各2~4日	入居者(2/9)	10分ごと												○	
	目的: GHから特養への環境移行の諸問題とターミナルケアの現状把握について																					
	結論: ケアや居住環境に継続性や一貫性が十分に整っていない状況での環境移行は危機的な状況をもたらすことが想定される。ターミナルケアに関してGHの位置づけが明確でなく、制度的な見直しが必要であること。																					
特徴: Hから特養への環境移行の事例が2名だけだが、4年間継続的に行動観察調査を行うことで、GHや特養での生活を様々な視点で分析している。																						

別表 フィールドワーク研究論文の概要(1)

第一著者 発表年	施設		方法				分析方法							
	単	複	行	住	高・ヒ	職・ヒ	内容							
							期間	対象人数	時間間隔	回数	型	属	環	移
	目的:													
	結論:													
	特徴:													
G H	鈴木健二 2003 ⁽²¹⁾	3	○			○	各施設1期2日	入居者(各施設9/9) 介護職員(4, 4, 3)	5分ごと	各施設266回				○
	目的: 物理的環境の違いがスタッフのケアに及ぼす影響													
	結論: 各諸室の平面は位置がスタッフの動線に影響している。連続的な見守りに繋がる開放的空間滞在や黙視待機が重要。スタッフのケアには物理的な空間のあり方に左右されないケアの本質的側面が存在する。													
	特徴: 観察時間帯のすべてが勤務時間と一致しない各施設4人の調査であるが、物理的環境や勤務態勢が異なる3施設の行動観察やスタッフへのヒアリング・アンケートによりスタッフのケアと物理的環境の関係だけでなく、ケアが持つ意味について明らかにしている。													
	絹川麻里 2003 ⁽²²⁾	○	○			○	行/2日間 行・ヒ/2年間	入居者(8/8)	行/5分ごと 行・ヒ/常時・1週 間に1回	290回				○
目的: 入居者の地域生活の構造について														
結論: 外出は事前決定でなくその日の生活の流れの中で自然発生的に起こることが多い。痴呆が重度化したADLも低下した入居者の外出はより狭い範囲で行われていた。														
特徴: 2日の観察で得られた外出が12事例であるが、介護職員の記録や参与観察により外出先ルート、内容などを調査し、さらに2日間の行動観察により外出への流れを具体的に示している。														
	嚴爽2003 ⁽²³⁾	○	○			○	9期各2~4日	入居者(14/9)	10分ごと	各期158~ 237回				○
目的: 身体的属性の変化やメンバーの入れ替わりに伴う全体的な生活展開や空間利用の4年間の変遷について														
結論: 痴呆の進行に伴い、居室の生活空間を構成する「もの」が居室の認識にあたって重要な手がかりになる。スタッフとの関わり方が変化することより「誘導された生活」と「自発的な生活」の適切なバランスの下に成り立つ生活を支える環境づくりが必要。身体的な状況、交流の様態、空間利用の様態が変化する。メンバーが大幅に入れ替わることがGHの生活に影響を及ぼす。														
特徴: 後半2年間は1年ごとの2日間による調査であるが、4年間にわたる継続的な調査より入居者の生活の変化を明らかにしている。														

凡例

施設	単: 単独施設を対象とした調査 複: 複数の施設を対象とした調査、数字は調査施設数	分析方法	型: 型分析 属: 属性間の行動比較 環: 環境間の行動比較 移: 環境移行の分析
調査方法	行: 行動観察 住: 居室の住まい方調査 高・ヒ: 高齢者へのヒアリング調査 職・ヒ: 職員へのヒアリング調査または記録収集調査 内容 期間: 調査期間 対象人数: (対象人数/定員) 時間間隔: 観察時間の間隔 回数: 観察回数		

参考文献

- 1) 日本建築学会編、建築・都市計画のための調査・分析方法、1987
 - 2) 佐藤郁哉、フィールドワーク、新曜社、1992
 - 3) 赤木徹也・足立啓・舟橋國男、我国における痴呆性老人の住環境に関する研究動向と課題、Vol.22(3)、411-424、2000.10
 - 4) 日本老年行動科学会、高齢者の「こころ」事典中央法規、1992
 - 5) やまだようこ、現場心理学の発想、新曜社、1997
 - 6) Cohen, U.・Weisman, G.、HOLDING ON TO HOME、The Johns Hopkins University Press、1991
(岡田威海監訳・浜崎裕子訳、老人性痴呆症のための環境デザイン、彰国社、1995.12)
 - 7) 日本建築学会編、人間・環境系のデザイン、彰国社、1997
- 以下はすべて本研究の研究対象とした既往研究であり、すべて日本建築学会計画系論文誌にて発表されたものである。
- 特養・老健におけるフィールドワーク研究論文
- 8) 小原博之・松本啓俊・外山義、痴呆性老人施設の建築計画に関する基礎的研究－住環境変化を視点とした事例的考察、第459号、47-57、1994年5月
 - 9) 柿沢英之・石井敏・長澤泰・山下哲郎、入所者のグループ形成とその特性に関する考察－個室型特別養護老人ホームの「集まり」に関する事例考察、第493号、153-159、1997年3月
 - 10) 橋弘志・外山義・高橋鷹志・古賀紀江、個室型特別養護老人ホームにおける個室内の個人的領域形成に関する研究、第500号、133-138、1997年10月
 - 11) 井上由起子・外山義・小滝一正・大原一興、高齢者居住施設における入居者の個人的領域形成に関する考察、第501号、109-115、1997年11月
 - 12) 井上由起子・外山義・小滝一正・大原一興、高齢者居住施設における個別的介護に関する考察－住まいとしての特別養護老人ホームのあり方に関する研究 その2、第508号、83-89、1998年6月
 - 13) 橋弘志・外山義・高橋鷹志、特別養護老人ホーム入居者の施設空間に展開する生活行動の場、第512号、115-122、1998年10月
 - 14) 林悦子・小滝一正・林玉子、個室空間の住まい方特性－特別養護老人ホームの個の空間に関する研究一、第517号、131-138、1999年3月
 - 15) 橋弘志・外山義・高橋鷹志、特別養護老人ホーム入居者の個人的領域形成と施設空間構成、第523号、163-169、1999年9月
 - 16) 井上由起子・外山義・小滝一正・大原一興・橋弘志・古賀紀江、介護方針の変更に伴う生活の場の再構築に関する考察－住まいとしての特別養護老人ホームのあり方に関する研究 その3、第524号、117-123、1999年10月
 - 17) 斎藤芳徳・外山義、特別養護老人ホームにおける車イス利用者の生活展開に関する考察、第529号、155-161、2000年3月
 - 18) 斎藤芳徳・外山義、高齢者居住施設における車イス利用者の移動の実態に関する考察、第531号、125-132、2000年5月
 - 19) 斎藤芳徳・外山義、高齢者居住施設における車イス利用者の移動能力と生活展開に関する考察、第532号、149-156、2000年6月
 - 20) 斎藤芳徳・外山義、老人保健施設における車イス利用者の移動能力の向上と生活展開への影響に関する考察、第538号、93-99、2000年12月
 - 21) 李ハヤン・谷口元、異なる平面構成を持つ高齢者施設における入居者の生活行動と滞在場所一日・韓高齢者施設6施設における入居者の生活と空間の使われ方、第541号、79-86、2001年3月
 - 22) 足立啓・亀屋恵三子・赤木徹也・橋本篤孝、特別養護老人ホームの段階的立て替えによる入居者の環境移行と性格が行動に及ぼす影響、第545号、143-149、2001年7月
 - 23) 松原茂樹・足立啓・赤木徹也・舟橋國男・隼田尚彦・鈴木毅・木多道宏 会話状況から見る痴呆性高齢者の交流の変容に関する考察、第545号、137-142、2001年7月
 - 24) 山田明子・芦沢由紀・竹宮健司・上野淳、個室型特別養護老人ホームの共用空間における入所者の生活行動に関する考察、第546号、105-112、2001年8月
 - 25) 橋弘志、特別養護老人ホームのケア環境と入居者の生活展開－個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究 その3一、第548号、137-144、2001年10月
 - 26) 西野達也・石井敏・長澤泰、入所者の定位様態からみた共用空間のあり方に関する研究 個室型特別養護老人ホームにおける解析的考察、第550号、151-156、2001年12月
 - 27) 古賀紀江・高橋鷹志・外山義・橋弘志、環境移行における「もの」の意味に関する研究 高齢者居住施設入居者が所有する「もの」の実態とその意味、第551号、123-127、2002年1月
 - 28) 毛利志保・谷口元、家庭的という視点からみた個室環境のあり方に関する考察 高齢者居住施設における住宅的な環境整備に関する研究、第552号、109-115、2002年2月
 - 29) 芦沢由紀・山田明子・登張絵夢・竹宮健司・上野淳、個室型特別養護老人ホームにおける入居者による居室の住みこなしに関する考察、第554号、123-130、2002年4月
 - 30) 橋弘志、特別養護老人ホーム共用空間におけるセミプライベート・セミパブリック領域の再考－個室型特別

養護老人ホームの空間構成に関する研究 その4一、第557号、157-164、2002年7月

31)三宮基裕・片岡正喜・鈴木義弘、痴呆性高齢者の居住施設環境整備に関する基礎的研究 アルツハイマー型と脳血管性の生活行動特性とその比較、第560号、111-118、2002年10月

32)松原茂樹・足立啓・植野知津子・児玉桂子・舟橋國男、入居者に対する介護職員の関わりに関する考察—ユニットケア型高齢者福祉施設における介護職員のケアのあり方に関する研究—、第561号、137-144、2002年11月

33)芦沢由紀・竹宮健司・上野淳、個室型特別養護老人ホームにおける入居者の生活様態とその変容に関する考察、第568号、25-31、2003年6月

34)大塚崇雄・齋藤芳徳・山脇博紀・山口健太郎・三浦研・外山義、特別養護老人ホームにおける車いす使用者の車いす操作・車いす座位の向上と生活展開—車いす使用高齢者の周辺環境のあり方に関する研究 その1—、第569号、47-54、2003年7月

35)李ハヤン・谷口元、高齢者居住施設における生活単位の一括・分散と共用空間の滞在行為に関する研究—日・韓、高齢者施設6施設の異なる空間構成における入居者の生活と空間の使われ方、第572号、25-32、2003年10月

36)大塚崇雄・齋藤芳徳・山口健太郎・絹川麻里・三浦研、移動・移乗能力と痴呆度からみた車いす使用高齢者の生活展開—車いす使用高齢者の周辺環境のあり方に関する研究 その2—、第576号、9-16、2004年2月

GHにおけるフィールドワーク研究論文

37)石井敏・外山義・長澤泰、グループホームにおける生活構成と空間利用の特性、第502号、103-110、1997年12月

38)永原聖・石井敏・松本啓俊、痴呆性老人の施設形態別にみたケアの実態に関する解析的考察—小規模居住形態の有効性の実証に関する研究、第514号、79-86、1998年12月

39)巖爽・石井敏・外山義・橘弘志・長澤泰、グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察—「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究(その1)、第523号、155-161、1999年9月

40)石井敏・巖爽・外山義・橘弘志・長澤泰、先進事例にみる共用空間の構成と生活の関わり—痴呆性高齢者のためのグループホームに関する研究 その1、第524号、109-115、1999年10月

41)巖爽・石井敏・橘弘志・外山義・長澤泰、介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察—「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究 その2、第528号、111-117、2000年2月

42)三浦研・外山義・阪上由香子・和渕大・小林正美、ケアおよび会話分析に基づく入居者—職員の関係性と生活展

開—小規模グループリビングに関する研究(その1)、第535号、91-97、2000年9月

43)石井敏・長澤泰、痴呆性高齢者のグループホームにおける空間利用の特性—フィンランドの痴呆・非痴呆グループホームにおける比較分析を通して、第537号、93-99、2000年11月

44)三浦研・阪上由香子・外山義・小林正美、行動観察および会話の分析から見たケア付き仮設住宅2棟の統合過程—小規模グループリビングに関する研究(その2) 第545号、129-135、2001年7月

45)鈴木健二・外山義・三浦研、痴呆性高齢者グループホームにおける入居者の生活の再編過程—痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(1)、第546号、121-126、2001年8月

46)鈴木健二・外山義・三浦研、痴呆性高齢者グループホームにおける入居者の生活とスタッフのケアの相互浸透—痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(2)、第552号、125-131、2002年2月

47)石井敏・長澤泰、生活行動に影響を与える環境構成要素—痴呆性高齢者のためのグループホームに関する研究(その2)、第553号、123-129、2002年3月

48)鈴木健二・外山義・三浦研、痴呆性高齢者グループホームにおける空間の構成と入居者の生活・スタッフのケアの展開—痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(3)、第556号、169-176、2002年6月

49)山田あすか・上野淳・登張絵夢・竹宮健司、痴呆性高齢者グループホームにおける居住者による固有の居場所の選択とその要因、第556号、145-152、2002年6月

50)巖爽・石井敏・長澤泰、生活環境の移行とターミナルケアの視点からみた痴呆性高齢者グループホームのあり方に関する考察、第557号、165-171、2002年7月

51)鈴木健二・外山義・三浦研、痴呆性高齢者グループホームにおけるスタッフの空間利用とケアの質的特性—痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(4)、第563号、163-170、2003年1月

52)絹川麻里・外山義・三浦研、グループホーム居住痴呆性高齢者の地域生活の構造に関する研究—都市型グループホーム入居者の外出行動による事例的考察—、第564号、157-164、2003年2月

53)巖爽・石井敏、継続的な視点からみた痴呆性高齢者グループホームの環境とその変容に関する研究、第569号、55-62、2003年7月

厚生労働科学研究費補助金（効果的医療技術の確立推進臨床研究事業）
分担研究報告書

ケアユニットのインテリアデザイン手法に関する研究（3）

——環境デザインツールとしてのCD-ROM制作——

委託研究者	吉田紗栄子	一級建築士
主任研究者	児玉桂子	日本社会事業大学教授
研究協力者	沼田恭子	一級建築士
	足立 正	一級建築士
	ジェリイフォーリー	環境デザイナー
デザイン	小島謙一	グラフィックデザイナー
CD-ROM制作	加賀谷友典	コンテンツプランナー

高齢者施設が、入居者にとってより居心地の良い、またそこで働くケアスタッフにとっては働きやすい環境に改善していくことは、入居者やスタッフの心身の健康にとって非常に大切なことであると考え。即効性のある効果的な改善を実現するためには、施設環境づくりのリーダーを養成することが必要であることから、研修プログラムの一環として環境デザインツールをCD-ROMの形で制作をした。

A. 制作目的

このCD-ROM+テキストは、施設環境づくりの手引きとして高齢者施設を家庭的な雰囲気にするための視点とインテリアデザインの基礎知識を知る目的で制作している。ケアスタッフが時間を見つけて一人で、あるいはグループで手軽に見られるように制作しており、そこには環境の重要性と環境の問題点を見つけ解決するための具体的なインテリアデザインのノウハウを盛り込んでいる。解決策が単に思いつきや個人の趣味で行われるのではなく、なぜその解決策が良いとされるのかを人間の生理的・心理的側面とインテリアデザインの基本、その両面から説明している。

CDはカラーで見られる利点、自分の興味に従ってどこからでも見られるゲーム感覚を生かすことができるので、自然に環境づくりに興味を持ってもらえることを期待して制作した。

このCD-ROM+テキストでは7ヶ所の居住空間と7つの環境要素を組み合わせ全体で33シーンの問題についてその解決案と根拠を示した（表-1）。例えば「廊下」ではキャプション評価法で出された「廊下に座ったり、お話ししたりするスペースがない」という問題を、環境デザイン要素の「ゾーニング（目的別のレイアウト）」「動線（人や物が動く道筋）」「色彩」「サイン・小物」などの視点から解決案を提示してある。また

その根拠となるデザインの基礎知識、例えば色の性質、組み合わせ方などの解説も加えた。さらにいくつかの成功事例を写真やパースで示してある。

B. 制作方法

最も有効なCD-ROMの制作方法を検討した結果、ホームページ製作用のソフトウェアを使うことにした。その主な理由は、1.どのパソコンでも再生できること 2.リンク機能を使うと関連の画面に素早く移れることである。また将来ホームページに載せる場合に作り直す手間が省ける上、必要に応じて画面を追加していくことができるという利点もある。

C. CDの構成

このCD-ROMは大別すると3つのパートに分かれている。

1.イントロダクション：インテリアデザインの必要性を示す画面及びパート2と3の導入部分から構成している（例図1,2,3）。

2.質問と答（Q&A）：7つの空間（A-エレベーターロビー、B-廊下、C-食堂兼ダイニング、D-居室、E-トイレ、F-洗面、G-屋外）を取り上げた（表1：環境デザイン要素の基礎知識）。

キャプション評価法のために撮影された写真の中から一般的と思われるシーンを抜き出して質問を想定し、それに対する答えまたは考え方のヒントを紹介した。

3.インテリアの基礎知識：建築的な要素2つと（①広さ②寸法・形）と、インテリアの要素5つ（③家具カーテン④素材⑤光⑥色彩⑦小物、サイン）の合計7つの要素について、基礎知識として持っていてほしい情報を盛り込んだ。

D. CDの内容

高齢者施設の部屋を横軸にし、環境デザイン要素を縦軸としたマトリックス（表1）の内容について画面で展開していく。全員が共有する環境デザイン要素を次ページに示す。

E. CDの使い方

2と3のパートは、それぞれが連携するようにデザインされており、「Q&A」から、該当する「インテリアデザインの基礎知識」へ飛ぶことができる。例えば図5の「照明器具をかえてみます」という矢印をクリック（選択）すると、瞬時にパート3の図-6「照明の高さ」へと導かれる。そして「バック」ボタンをクリックすることで、Q&Aのテキストに戻ることができる。

F. CDの今後の課題

高齢者施設を設計する際に、施設側の要望を設計者によりよく伝えるためのコミュニケーション手段としても役立つと考えられる。ホームページ作成用のソフトは内容の更新が簡単である利点をいかし、実際にこのCDを使った「環境改善事例」を足していくなどしてバージョンアップを図っていくことが必要であろう。

高齢者施設の環境デザインに関する参考資料は少なく、翻訳されたものが多い。日本の実情に合わせた環境デザインの参考資料として広く一般に活用してもらう方法を検討することも重要である。

D. CDの内容

環境デザイン要素		室名		A.玄関・ELV・ロビー	B.廊下	C.居間・食堂	D.居室	E.トイレ	F.浴室	G.屋外
		①	②							
空間の把握	①	広さ(ゾーニング・動線)	○ 家具配置	○ 休息・談話 コーナー	○	○ 家具配置				
	②	寸法・形			○ 家具配置	○			○ 固浴 家庭的スケール	○ アクティビティ 散歩
インテリアエレメント	③	家具、カーテン・ブラインド		○	○ カーテンの種類、かけ方 椅子の選び方	○ カーテンの種類、かけ方 光量調整				○ 外部景観 日光浴 ベンチ
	④	素材		○ 吸音素材	○ 食器	○ 落ち着いた安心感 吸音素材	○ 安全性 清掃 メンテナンス	○ 床の素材	○ 舗装材 植物	
	⑤	光(自然光、照明)	○ 種類、使い方		○ 光色(食欲)		○ 照明のしかた 洗面台の照明 顔色 光色、光量	○ 照明のしかた		
	⑥	色彩	○ めだたせる色、 かくす色	○ コントラスト 床と壁	○ 配色	○ 色調	○ 色の対比	○ コーディネート のしかた		
	⑦	小物サイン	○ 文字や色によらないサイン	○ 絵の飾り方		○ 個室の表札	○ 分かりやすさ			

表1：各室と環境デザイン要素のマトリックス

(1) 広さ(ゾーニング・動線)

- ・分かりやすさ
- ・自分で選ぶことの重要性
- ・寸法、形の広さの家具のレイアウト

(2) 寸法・形

- ・「家庭的」なスケール感
- ・視点の高さ(車椅子、うつむき姿勢)による見え方

(3) 家具、カーテン

- ・家具の選び方
- ・カーテンの選び方

(4) 素材

- ・床、壁、天井の素材の種類、特徴、使い方
- ・素材の触感、色彩、分量

(5) 光(自然光、照明)

- ・自然光を取り入れることの重要性
- ・照明の種類、使い方
- ・照明の高さ
- ・光の色

(6) 色彩

- ・明度、彩度、色相、
- ・対比、バランス

(7) サイン・小物

- ・サインの考え方
- ・絵の飾り方
- ・音の活用

家庭的な雰囲気をつくるためのインテリアデザインを考えよう

私たちは周囲の環境から心身ともに大きな影響を受けています。それゆえ老人ホームに暮らす人々とそこで働くスタッフにとって居心地のよい環境をつくることはとても大切なことです。このCDは「家庭的」な雰囲気を老人ホームの中でどう実現していくかを考える際の視点と方法について関るデザインツールとしてつくりました。

監修：児玉桂子
(日本社会事業大学教授)



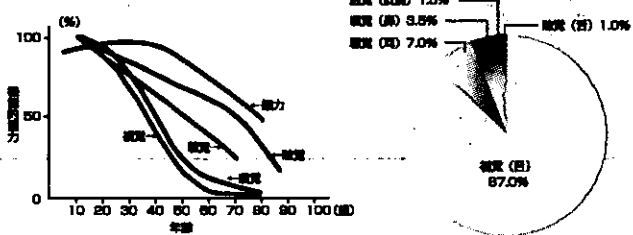
図1

Introduction-1

五感の衰えを知る

建築やインテリアに関わる環境をデザインしていく私たちは、この視覚の低下を補い、聴覚や触覚といった他の感覚をもデザインの中に組み入れることを考えなければなりません。

まずシニアの生理的特徴と五感の変化を知っておきましょう。



加齢による感覚と筋力の変化
感覚と筋力は加齢によって衰えてきます。特に視覚の変化が顕著であることがわかります。

人間の五感の情報処理能力
私達は自分のまわりの環境を五感で認識しながら生活しています。この五感から得られる情報全体を100%とすると、視覚からは87%もの情報を得ています。

図2

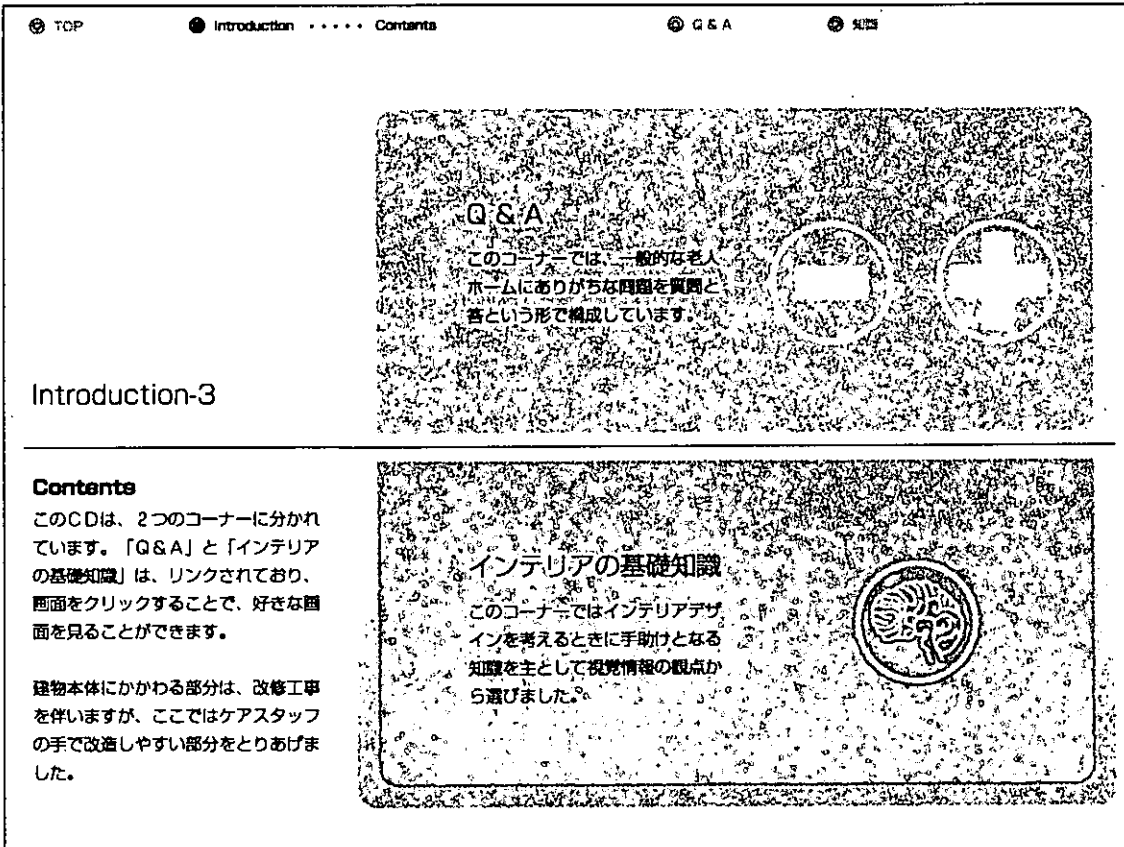


図3

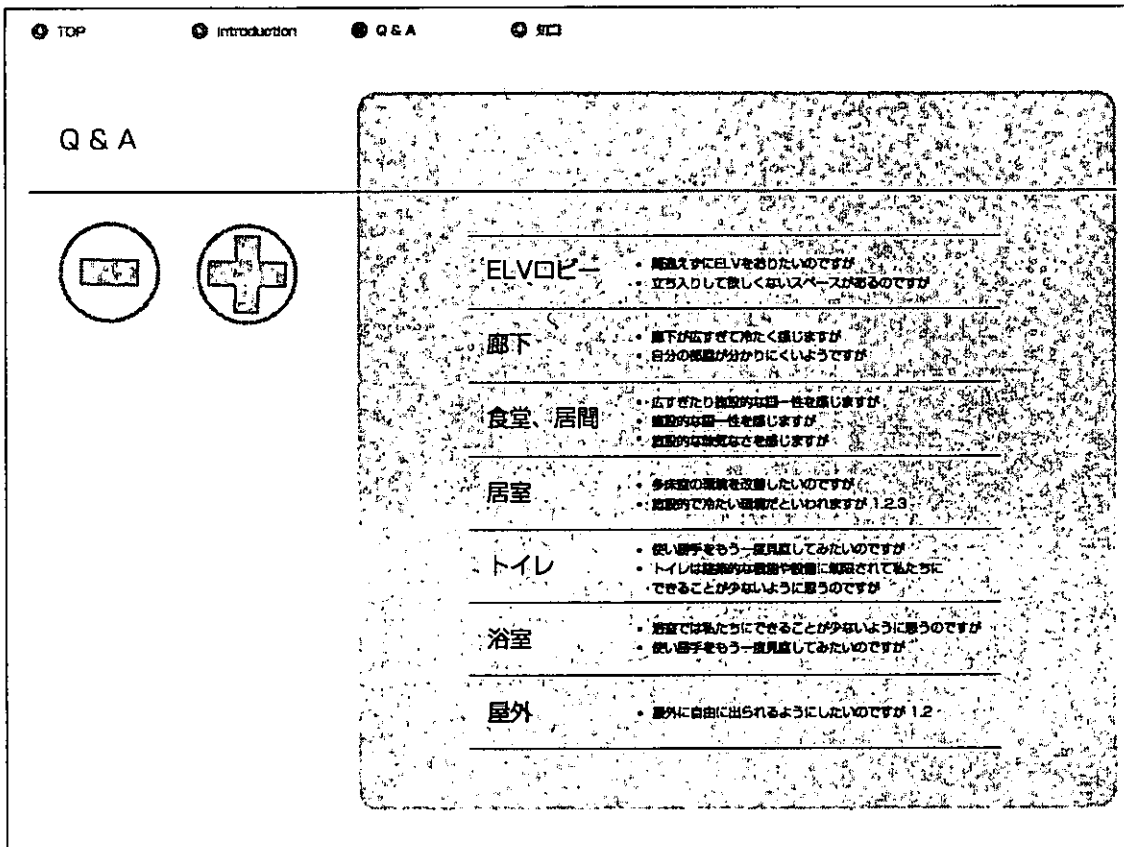


図4



現状の問題点

できないとあきらめていませんか？

私たちにできること

断熱的で冷たい環境だといわれますが 1

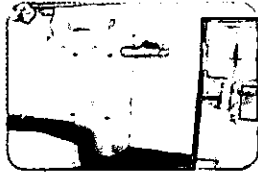
使い慣れた自分の家具を持ち込みます

照明器具をかえてみます

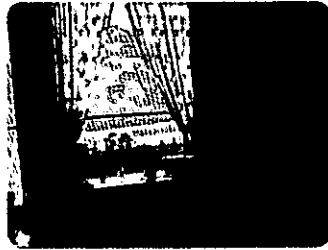


「グループホームあまぞら」CONFORT2004.2

冷たい感じの床材、何も書っていない壁、暖房として用意されたスチール製ロッカーなどが暖かみの少ない環境をつくっています。



居室



その人らしいものがあつたら、生活の場に適応することができる。「グループホームあまぞら」CONFORT2004.2



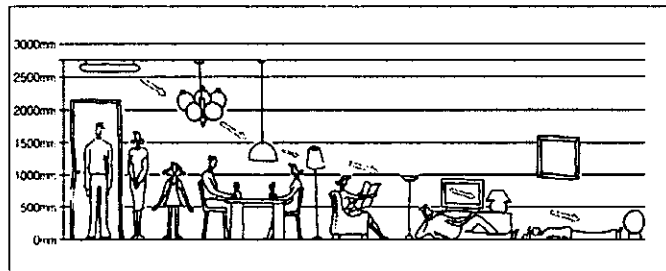
図5



光 (自然光、照明)

照明の高さで変わるくつろぎの度合

天井に均一に並べられた画一的な照明器具は、家庭的とはいえません。居室には少なくとも2種類の照明が必要です。全体の明るさを100をすると60は部屋全体を明るくする光、そして残りの40は手許を照らす照明に使います。



照明の高さで変わるくつろぎの度合
照明器具の位置がだんだん下がると、照り方は部屋を照らすものから部分を照らすものになってきます。天井灯など高い位置の照明は広範囲の照明を、スタンドなど低い位置の照明は寄り添うような照明になります。(THE LIFE CREATOR VOL.28)

図6

インテリアの基礎知識



広さ(ゾーニング・動線)

- ・分かりやすさ
- ・自分で選ぶことの重要性
- ・寸法、形の広さの家具のレイアウト

寸法・形

- ・「家庭的」なスケール感
- ・視線の高さ(取っ手、うづむき姿勢)による見え方

家具・カーテン

- ・家具の選び方
- ・カーテンの選び方

素材

- ・床、壁、天井の素材の種類、特徴、使い方
- ・素材の質感、色彩、分量

光(自然光・照明)

- ・自然光を取り入れることの重要性
- ・照明の種類、使い方
- ・照明の位置
- ・光の色

色彩

- ・明度、彩度、色相
- ・対比

サイン・小物

- ・サインの考え方
- ・絵の描き方
- ・書活用の活用

図7



やってみよう

家具を入れて両取りを考える

部屋の広さは家具や設備器材などを入れてみることで、実際に使える広さが分かります。家具や備品を平面図に置き広さや使い勝手のチェックをすると、頭の中だけではわからなかった部分が見えてきます。次頁の家具の大きさをAの大きさにプリントアウトして下さい。縮尺は1/50ですから1/50に描かれた平面図に置いてみます。

三角スケール



テープ



ハサミまたはカッター



スケール



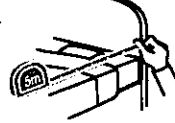
平面図



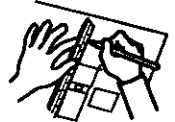
厚紙



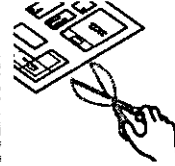
測る



描く



切る



レイアウトを試みる

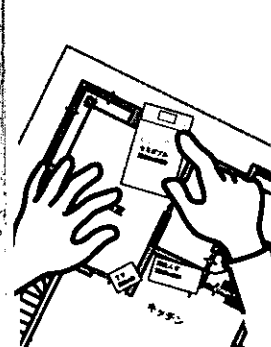
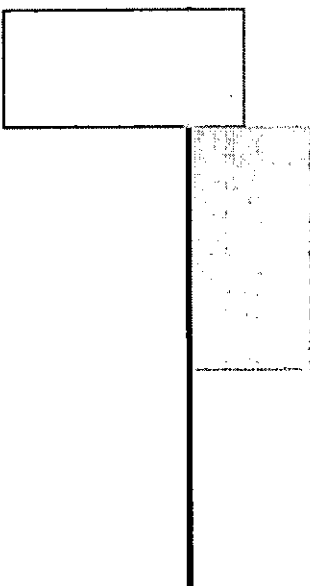


図8



痴呆性高齢者への環境支援指針(PEAP)を用いた

施設環境づくり実践ハンドブック



平成 16 年(2004)3 月

主任研究者

児玉桂子 日本社会事業大学教授